



夜勤明けの看護師さん

~眠れない夜に、あなたと~

夜勤明けの看護師さん（体験版）

蜜夜文庫

く 眠れない夜に、あなたとく

蜜夜文庫

...

第二話 眠れない夜に

病院の夜は、こんなにも長いのかと、初めて知った。

深沢蒼、二十四歳。バイクで会社に向かう途中、右折してきた車を避けきれずに、俺は宙を舞った。気づいたときには、救急車のなかで天井の照明が流れていくのを、ぼんやりと見上げていた。右脚の骨折。全治二ヶ月、入院は一ヶ月。医者にそう告げられても、俺は、へえ、と他人事のように聞いていた。

消灯後の病室は、静かだった。四人部屋のカーテンの向こうから、誰かの寝息と、点滴のしずくが落ちる、かすかな音がする。廊下の常夜灯の、青白い光が、少しだけカーテンの裾から漏れていた。天井には、非常灯の緑のランプ。俺は、その色を、もう何時間も見つめている。

脚が、鈍く痛んだ。ギプスで固められた右脚は、自分のものじゃないみたいに重い。寝返りひとつ、まともに打てない。けれど、眠れないのは、痛みのせいだけじゃなかった。

——誰にも、連絡しなかったな。

事故のことを、俺は、家族にも、会社にも、必要最低限しか伝えていない。心配をかけたくくない、というより、迷惑をかけたくなかった。母に電話したとき、「大げさにしないで」と、先に言ってしまった。会社には、しばらく休みます、とだけ。見舞いに来なくていい、と。

そうやって、いつも、俺は一人で抱えてしまう。子どものころからそうだった。弱音を吐けば、相手を困らせる。困らせるくらいなら、黙って飲み込んだほうがいい。そう思っ生きてきた。だから、この、誰も来な

い病室が、俺には、いつそ、しつくりきていた。

スマホの画面を点けると、午前二時を過ぎていた。通知は、ひとつもない。俺は、小さく笑って、画面を消した。暗くなった天井に、また、緑のランプだけが残る。

そのとき、廊下から、やわらかな足音が近づいてきた。

カーテンの隙間に、白い影が差す。そつと、布が引かれた。

「……起きて、いらっしやいますか」

小さな、囁くような声だった。ペンライトの、細い光が、俺の顔を避けるように、手元だけを照らしている。俺は、まぶしさに目を細めながら、頷いた。

「点滴の、確認だけ、させてくださいね。……眠れませんか」

夜勤の、看護師さんだった。

まだ若い。たぶん、俺より、少し上くらい。ひとつに結んだ髪。白衣の襟元から覗く、細い首。動きに合わせて、消毒液のにおいに混じって、ほのかに、石鹸のような、清潔な香りがした。彼女は、点滴の残量を確かめ、俺の腕のテープを、そつと指で押さえ直した。ひやりとした、けれど、やわらかい指だった。

「痛みは、どうですか。……我慢、してませんか」

「……大丈夫、です」

反射的に、そう答えていた。いつもの癖だった。けれど、彼女は、手を止めて、少しだけ、俺の顔を覗き込んだ。ペンライトの淡い光のなかで、その目が、静かに、俺を見ている。

「無理、しないでくださいね。……痛いときは、痛いって、言っていいますよ。ここでは」

その一言が、なぜか、胸の奥の、固く結んでいた場所に、するりと入り込んできた。痛いって、言っていない。そんなこと、久しく、誰にも言われていなかった。

「……ちよつと、だけ。眠れなくて」

気づいたら、そう漏らしていた。自分でも、驚いた。

彼女は、責めるでもなく、慌てるでもなく、ただ、「そうですよね」と、静かに頷いた。

「入院した最初の夜って、みなさん、眠れないんです。慣れない天井で、体も、いろいろあつて。……当たり前ですよ」

そう言つて、彼女は、俺の枕元の点滴スタンドの位置を、そつと直してくれた。それから、少しだけ、迷うように、付け足した。

「わたし、朝まで、この階にいますから。……眠れなかったら、ナースコール、遠慮なく押してくださいね。話し相手くらいなら、いつでも」

胸の名札に、〈水沢〉と、書いてあった。

「水沢、さん」

「はい」

「……ありがとうございます」

うまく言えなかったけれど、それだけは、言えた。水沢さんは、ふっと、やわらかく微笑んで、「おやすみなさい」と、カーテンを、そっと閉めた。遠ざかっていく、やわらかな足音を、俺は、しばらく、耳で追いかけていた。

*

結局、その夜も、俺は、あまり眠れなかった。

けれど、不思議と、さつきまでの、胸を締めつけるような孤独は、少しだけ、薄まっていた。誰かが、この同じ夜のなかに、起きていてくれる。それだけのことが、こんなにも、心細さを、和らげるものなのか。

窓の外を見ると、街の明かりが、遠くに、点々と灯っていた。初冬の、冷えた夜気が、窓ガラス越しに、伝わってくる。あの明かりの下で、みんな、眠っているのだろう。俺だけが、取り残されているような気がしていた。さつきまでは。

明け方近く、もう一度、水沢さんが、巡回に来了。俺が起きているのに気づくと、彼女は、少し困ったように、けれど、うれしそうに、笑った。

「……まだ、起きてたんですか」

「はは。……名残惜しくて」

「もう。……変な人」

小さく笑って、彼女は、俺の毛布を、肩まで、そっと引き上げてくれた。その、なんてことのない仕草に、俺の胸は、なぜか、じんと熱くなった。母親がしてくれるような、それとも、もっと違う何かのような、あた

たかぎだった。

毛布を直しながら、水沢さんが、ふと、窓の外に目をやった。街の明かりを見る、その横顔に、一瞬——笑みではない、何か、翳りのようなものが、よぎった気がした。けれど、俺が瞬きをすると、それは、もう、消えていた。

「……夜勤つて、大変じゃないですか」

つい、訊いてしまった。彼女は、窓の外を見たまま、少しだけ、間を置いた。

「……そうですね。でも、わたし、夜のほうが、好きなんです。静かで。……起きている人と、ちゃんと、向き合える気がして」

その声は、やさしくて、けれど、どこか、自分自身に言い聞かせているようにも、聞こえた。

「じゃあ、おやすみなさい。今度こそ、ちゃんと、眠ってくださいね」

カーテンが閉まる。足音が、遠ざかる。窓の外が、少しずつ、白んでいく。

このとき、俺は、まだ知らなかった。

この、退屈なだけのはずだった一ヶ月の入院が、閉じこもつてばかりだった俺の心を、もう一度、こじ開けることになるなんて。この、夜勤の看護師さんの、白衣の下にある寂しさまで、知ってしまうことになるなんて——。

第ニ話 消灯後の談話室

それから、俺の入院生活には、ひとつ、楽しみができた。

昼間は、退屈だった。リハビリと、点滴と、味の薄い病院食。窓の外を眺めて、時間が過ぎるのを待つだけ。けれど、夜になると――消灯の少しあとに、あの、やわらかな足音が、廊下を近づいてくる。それを、俺は、いつのまにか、心待ちにするようになっていた。

水沢さんは、巡回のたびに、少しだけ、俺の枕元で足を止めてくれた。点滴を確かめる、ほんの数分。それでも、俺たちは、ぼつり、ぼつりと、言葉を交わした。今日のリハビリのこと。窓から見えた、夕焼けのこと。彼女が夜勤明けに食べる、コンビニのプリンが好きだ、なんていう、他愛のないこと。

不思議だった。昼間、看護師さんたちに囲まれているときの水沢さんは、てきぱきとして、少し近寄りがたいくらい、しつかりしていた。けれど、消灯後の、二人だけの数分間の彼女は、どこか、素の、ひとりの女の人の顔をしていた。

「深沢さん、笑うようになりましたね」

ある夜、水沢さんが、ふいに言った。

「え」

「入院した日、すごく、思いつめた顔してたから。……誰にも、頼らないぞ、みたいな」

図星だった。俺は、決まりが悪くなつて、頭をかいた。

「……バレてました」

「ふふ。わたし、たくさんの人を見てきましたから。……深沢さんみたいな人、いちばん、心配なんです。ひとりで、全部、抱えちゃう人」

その声は、やさしくて、けれど、少しだけ、寂しそうだつた。まるで、自分のことを、言っているみたいに。

*

消灯から、しばらく経つた、ある夜のことだつた。

どうしても、眠れなかつた。脚の痛みと、それから、頭のなかを巡る、いろんな考え。ナースコールを押すべきか、迷っている、ちょうど、巡回の水沢さんが、カーテンを開けた。俺が起きているのを見て、彼女は、少し考えるように、こう言つた。

「……少し、気分転換、しませんか。談話室、今、誰もいないので」

車椅子に、そつと移してくれる。彼女の手が、俺の背中と、脚を支える。あたたかくて、慣れた、けれど、丁寧な手つきだつた。触れられた場所から、じんわりと、熱が伝わってくるようで、俺は、変に、意識してしまつた。

消灯後の談話室は、真つ暗だつた。電気を点けずに、水沢さんは、俺の車椅子を、大きな窓のそばまで運んでくれた。窓の外には、眠らない街の明かりが、宝石を撒いたように、広がっていた。初冬の澄んだ空気のおかげで、その光は、いつもより、くつきりと、鮮やかに見えた。

「……綺麗ですね」

「でしよう。わたし、この時間の、ここからの景色が、いちばん好きなんです」

彼女は、俺の隣に、そつと腰を下ろした。自動販売機で買ってくれた、あたたかいココアを、両手で包むように持たせてくれる。かじかんだ指先に、その熱が、じんわりと沁みた。

「水沢さんは、どうして、看護師さんに？」

なんとなく、訊いてみた。彼女は、窓の外の明かりを見つめたまま、少し、間を置いた。

「……子どものころ、弟が、体が弱くて。よく、入院してたんです。そのとき、看護師さんが、すごく、やさしくて。怖くて泣いてる弟に、ずつと、寄り添ってくれて。……わたしも、あんなふうに、誰かのそばにいられる人になりたいって、思ったんです」

その横顔に、また、あの、翳りが、よぎった。俺は、それ以上、訊いてはいけない気がして、黙って、ココアを、口に運んだ。甘くて、少しだけ、ほろ苦かった。

「変ですよ。……人の心配ばかりして。自分のことは、いつも、後回しで」

彼女は、ふつと、自嘲するように、笑った。

「変じゃ、ないです」

俺は、言った。自分でも、驚くくらい、はつきりと。

「……俺、水沢さんに、救われてるんです。この、夜の時間に。だから、水沢さんのやってることは、ちゃんと、誰かに、届いてます。……少なくとも、俺には」

水沢さんが、俺のほうを、見た。暗がりのなかで、その目が、揺れているのが、わかった。街の明かりが、彼女の頬を、ぼんやりと、照らしている。

「……ずるいですね、深沢さんは」

小さな声だった。

「そんなこと言われたら、わたし……夜勤が、来るたびに、深沢さんの顔、見に来ちゃう」

「……来て、ください。俺も、待つてるんで」

言うてから、心臓が、跳ねた。冗談にすればよかった、と思った。けれど、もう、遅かった。

二人のあいだに、沈黙が落ちた。窓の外の街の明かりと、遠くのナースステーションの、かすかな物音。それだけが、俺たちを、包んでいた。

水沢さんの手が、俺の手の上に、そつと、重なった。ココアの熱で、あたたまった、やわらかい手。俺は、その手を、握り返していた。彼女の指が、応えるように、俺の指に、絡んでくる。

「……こんなこと、いけないのに」

彼女が、俯いて、囁いた。

「患者さんと、看護師なのに。……わたし、なにやつてるんだろう」

俺は、握った手に、力を込めた。暗がりのなかで、彼女の顔が、ゆつくりと、上がる。潤んだ瞳が、まっすぐに、俺を見ていた。濡れたまつげが、街の明かりを受けて、きらりと光る。互いの吐息が、触れそうなほど、近くにあった。

——もう、止められない。

俺は、そう思った。水沢さんも、目を閉じない。ただ、逃げずに、俺を見つめている。二人の距離が、少しずつ、なくなっていく。

――
続きは製品版で。二人だけの、夜のカルテを。